

GF ジェンダーフォーラム 通信

GENDER FORUM PRESS

女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112

PERFORMANCE

講談「フラガール物語

常磐炭礦余聞」

2008年10月22日、講談師の神田香織さんをお迎えし、フラガール物語の講談をしていただきました。神田香織さんは、福島県いわき市のご出身で、二代目神田山陽門下で修行され、1989年に真打になった講談師で、「はだしのゲン」やチェルノブイリ原発を演目に加えるなど、社会派の講談師として活躍されています。和光大学での公演は2回目。前回のご自分の半生を語った「花も嵐も講釈師が語ります」で、好評を博しました。(『GF通信』第9号参照)

1960年代後半、全国の他の炭鉱と同様、常磐炭鉱も斜陽化の道を歩んでいました。その中で、当地にハワイアンセンターを建設する構想が持ち上がり、フラダンスのダンサーを養成する舞踊学校がつけられました。

そこに集まった娘たちは、必死にフラダンスに挑戦していきましました。炭鉱で生まれ育った娘たちにとって、当時は母や姉たちにならって、炭鉱で選炭工として煤にまみれて働く道か、結婚を夢見ること以外には、人生の展望が見えなかったからです。娘たちががにわか仕込みのダンサーとして育てられ、ハワイアンセンター開設にこぎつけるまでの過程が、2006年に李相日監督によって「フラガール」として映画化され、日本アカデミー賞を独占しました。



炭鉱の娘たちがフラガールになっていく過程は、男性中心に動いてきた炭鉱の町で、男性の陰に寄り添って生きるしかなかった母たちの世代と異なり、娘たちが自分たちの人生を

自ら切り拓くことができるようになったという、ジェンダー秩序の変革を担った娘たちの、一種の成長物語といえます。他方で、これは、娘たちの身体が観賞用として商品化され、セクシュアル・ハラスメントの嵐を潜り抜けながら、ダンサーという職業を確立していく、ジェンダー秩序の再編成の物語ともいえます。



ジェンダーフォーラムでは、子どもの頃に開設まもないハワイアンセンターに遊びにつれていってもらったという、女性講談師の神田さんが、いわき弁を駆使しながら、どのような物語を展開されるのか、楽しみに企画を進めました。

期待に違わず、神田さんの公演は力のこもったお話で、随所にご自分のコメントを挟みながら、映画「フラガール」の場面を再現。顔の表情と、口調の緩急、声の高低に、時折加わる張り扇の音で、一人一人の娘たちの心情や感情の動きを、細やかに表現する、講談ならではの味わい深いものでした。学内外から集まった200名近い観客は、40年前に起きたジェンダーをめぐる葛藤と選択のドラマを、あたかも自分の身に起きたことのように、かたずを吞んで聞きほれ、講談の醍醐味を満喫していました。この公演を聴いて、人々の生活と意識が、産業構造の変換や会社の方針転換によって翻弄される姿に心を痛める一方で、ジェンダー役割が歴史によって変化していくものだという事実を、あらためて確認した学生も多かったようです。

(井上輝子/現代社会学科)

講談 話芸の力

講談はもと講釈ともいい、江戸後期～明治・大正にはとても盛んだった演芸・話芸だ。遡れば仏教教学の講釈師から出た「太平記読み」を祖とし、識字率の低い時代には歴史物語や話題のニュースを庶民にわかりやすく解説した。戦前の新聞ニュースの文体は講談調だったし、近代小説は神田伯龍など名人講釈師の語り口から言文一致の文体を確立した。

講談はマンガの源流の一つでもある。大正時代、講談雑誌「立川文庫」にスーパーヒーロー猿飛佐助が登場しなければ、忍者映画も忍者マンガも、「科学忍者隊」も生まれなかったかもしれない。講談社の「講談倶楽部」からは『バガボンド』の原作『宮本武蔵』の吉川英治が出た。何より、擬音が多く、盛り上がったところで次を期待させつつ「続く」となる講談の「切れ場」は、連載マンガの流れそのものだ。

しかし、字が読める人が増えれば活字媒体に取って代わられる。音響効果は浪曲の方が上だし、お笑いでは落語や漫才にかなわない。映画、ラジオ、テレビの普及が講談の衰退に追い打ちをかけ、お笑いブームにも乗りそこねた。

マイナーな講談界に、ここ二十数年、女性の入門者が増えている。神田一門など6割以上が女講談師。しきたりにうるさい芸界で半数以上を女性が占めた例は過去にない。

神田香織さんはそんな講談界でも「社会派」として知られるユニークな存在だ。福島県いわき市の県立磐城女子高出身だから、方言が飛び交う「フラガール」はお手のもの、と思ったら、映画の方言は磐城方言ではなかった。同じ福島でも県南の中通り地方出身の人が方言指導を担当したという。道理で中通り出身のぼくには聞き取りやすいわけだ。広い県内で浜通り・中通り・会津はかなり異なるし、県北と県南でもだいぶ違う。無アクセント、尻上がりイントネーションはほぼ共通するが、「そうかい？」はいわきでは「そうげ?」「んだげ?」だが中通りでは「んだがい?」となる。当然、和光大のほとんどの人は方言部分を理解できなかったと思う。それでも、学生たちの多くは神田さんの熱のこもった話芸、伝統に裏打ちされた緩急自在の「ことばの力」に引き込まれ、懇親会でも「初めて聞いたけどおもしろかった」「また聞きたい」「もっと知りたい」という声が多く聞かれた。浅草には講談の定席もあるし、新宿や上野の寄席でも1日に1人くらいは講談がかかる。

この冬、岩波の新古典文学大系・明治編に、『講談 人情咄集』が加わった。数々の歌舞伎や小説や映画・マンガのネタ本となった日本の話芸・講談。そのおもしろさを、もっと多くの人に知ってもらいたい。

(関根秀樹/非常勤講師)

「フラガール」図書館テーマ展示

図書館では学内で開催されるさまざまなイベントなどと連携して、関連する本や雑誌などを並べた「テーマ展示」を3階フロアにて企画しています。

今回は「講談による『フラガール』」ということで準備にとりかかりました。想定した「キ



ーワード」は、舞台が常磐炭鉱とハワイアンセンターということで、まず「炭鉱」・「観光産業」。そして映画作品を講談で演じる、ということなので、「講談」(話芸)。そして「ハワイアン」や「フラダンス」もぜひ、と考えたのですが、残念ながら在庫資料がなく断念(後日、早津敏彦氏による名著『日本ハワイ音楽・舞踊史』を入れました!)

「炭鉱」や「観光産業」については、2階の書棚で『写真が語る常磐炭田の歴史』『炭鉱と地域社会』をはじめ、関連図書30冊ほどをピックアップ。1階では土門拳『筑豊のこどもたち』などの写真集を数冊選びました。

ちょっと手ごわかったのが「講談」です。そこで最近の頼みの綱であるネット検索で見つけたのが講談研究のサイト。

講談研究資料の一覧(なんと江戸時代から現代まで!)があり、そこから、本学に所蔵しているものや入手できそうな文庫本などを見つけることができました(『昭和高原の名人たち』『おもしろ講談ばなし』など)。伝統芸能としての「講談」の世界もなかなか奥が深い!と感じ入った次第です。

雑誌では『キネマ旬報』のバックナンバーで、映画のカラーグラビアが掲載されている号を展示。また名人の話芸を集めたCD『講談黄金時代』(6枚組)も合わせて購入しました。視聴覚資料は館外貸出できませんが、4階のAV Libraryで視聴できます。映画のDVDも入りましたので、未見のかたはぜひごらんになってください。

(石谷エリ子/梅根悟記念図書館)

南風そよぐ、母なる山へ

ドキュメンタリー「人間列島 みちのくの椰子の葉陰で」

♪ハー 朝も早よからヨー カンテラ下げてナイ

坑内稼ぎもヨードント 国のためナイ

これは1971(昭和46)年4月8日に放映されたNHKの番組「人間列島 みちのくの椰子の葉陰で」の冒頭で流れる常磐炭坑節です。産業の転換を象徴するかのよう、ひなびた男の歌声は情熱的なポリネシアのリズムにとって代わられ

ます。このドキュメンタリー番組が制作されたのは常磐炭鉱で約5万人が失職することになった、いわゆる大閉山の年でした。退職金や住居をめぐる対立が生々しく映し出されています。

意外なのは、男性中心のイメージが強いヤマの一大事に女性の姿が目立つことです。集会で会社に対する要求と不満を述べ立てる女性組合員、ストライキの予告に耳をかたむけるかっぽう着姿のお母さんたち。つつましい炭鉱住宅の一室で取材をうけた老婦人は幼い子どもを家において、袖なしの綿入半纏に腰巻一枚といった格好で石炭を運んでいたそうです。

番組は開園5年をむかえた常磐ハワイアンセンターで地域経済の再興をめざす人々も捉えています。なかでも舞台や練習で疲れたダンサーたちにバナナを配る寮の世話人の姿は印象的です。彼はかつて労働組合の幹部として常磐のみならず全国のヤマの男たちに号令をかけていたのですが、一転、嬉々として娘たちの世話に励んでいます。一山一家の相貌も不変ではありません。国や炭鉱経営者を頂点とした家父長的な構造をなしていた父なる山は、エネルギー革命を機に湯の温かさで人を呼び人を包み込む母なる山へと変貌していくかのようです。

(「フラガール」たちのモデルとなったダンス教師や娘たちが登場しているこの映像はNHK番組公開ライブラリーで視聴可能です。)

(長尾洋子/総合文化学科)

RECENT WORKS

村の女たちをだれが見たのか

田植えはチョコボ、チョコボ植え(早乙女が気ままに植える)でしたが、おとうさんが正条植えを率先して導入しました。これによって米づくりが上手にやれるようになりましたし、米の品質もよくなったのでしょう。1等米がたくさんでき、毎年の商品会で大盃、中盃をもらいました。正条植えを取り入れた功績で表彰されましたが、表彰状の名前はおじいさん名でした。おかしいと思っておかあさんに「なぜおとうさんの名前が書かれないのか……」と尋ねました。当時は、戸主の名にするのがならわしということで、おじいさんが還暦になって、おとうさんの代となることがわかりました。(略) 田植えは女の仕事でした。「5月15日は早乙女様よ。それが過ぎればワレごなし(お前)」と田植えのときは女は大事にされていたようです。

以上は、1899(明治32)年に山口県内の農家に生まれた女性が、81歳の時、聞き取りに答えて語った暮らしの話の一部です。彼女の子供時代のことですから、聞き取り時の70年

COMMENTS FROM STUDENTS

学生たちの感想

フラガール達の活躍は、まさに女性が表舞台上上がった革命的な出来事だったのではないかと。だからこそこの物語は、ただの町おこしや、経済的危機の回避の為、身を挺してけなげに頑張る乙女達というような安っぽい感動物語では終わらず、どこか清々しい、爽やかな印象を私達に残すのではないかと思う。(心理教育学科1年)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一山一家を支える為に炭鉱の男と結婚し、子供を生き育て家庭と山を守るのが女の役目だったのであろう。女性の社会進出という面では大きな時代の区切りだったのかも知れない。この物語をあえて女性が語る所に何かかしっくりきた。これをどんなに男の人が声を張り威勢よく語ったとしても、同じようには聞こえない気がする。それはやはり女性達の戦いを描いた物語だったからなのだろうか。(心理教育学科1年)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

昭和40年代、エネルギー革命で炭鉱が次々と閉鎖されていたのは知っていましたが、背景にあのような物語があったことは知りませんでした。炭鉱では男女共に働いていたようですが、主に力仕事をするのは男性です。それがフラガールを売りにすることで女性が主となる働き手になります。社会が変わるという事は、その地の人々にこんなにも影響を及ぼすものだ改めて感じました。(現代社会学科1年)

ほど前、現在からは100年ほど前のことです。当時、稲作改良に熱心に取り組む父親の仕事ぶりを誇らしく思っていたので、それなのにその功績が公的には父親の名では記されないことに疑問をもったこと、また、田植えは女の仕事で、女は田植え期間は「早乙女様」と大事にされたが田植えが終われば「お前」扱いであったことを、印象に残っていることとして語っています。70年たっても忘れず鮮明に語れたのは、それらが彼女にとって未だ解消されない疑問、いだき続けた小さな怒りだったからではないでしょうか。

冒頭の文章は、『村の歴史とくらし・VII』という報告書(農林水産省農蚕園芸局普及部生活改善課編、農山漁家生活改善研究会刊、1982年)からの引用です。お分かりのように、聞き取りも出版も戦後なされたものです。私は2007年度の1年間、山口市所蔵の戦前期町村役場文書中の農業・農村振興に関するものを閲覧・収集しましたが、それらのなかに、女性の労働を意識した記述は皆無であったと言ってもよいほどでした。例えば、冒頭の引用文にある「正条植え」について

は奨励・実施成績に関する記録がありました。けれども、実施に不可欠の女性の労働には触れられていません。農村の女性の労働の実態に関しては、戦前期の行政がいかに無頓着であったか、知らされたような思いでした。

(奥須磨子/経済学科)

女性がいなけりや映画は減ぶ！

いきなりなタイトルですみません。GF 通信に載せるんだからと力んで付けたわけじゃないんですよ。ましてや締め切りを過ぎてから適当な事を書いているわけでもありません。現状、そうなんですから他に書きようがないんです。

「最近の仕事について」というご依頼をいただき、六月頃公開の映画について宣伝がてら書こうとはしてみたんですが、ジェンダーにこじつけて格調ある文体を目指したら、ヘンテコな内容になって気が滅入っちゃったので、上のタイトルになりました。あっ、映画自体はお気楽なライトコメディ風です。気が滅入る心配はありません。お時間に余裕がありましたら是非ご覧になってください。

宣伝も済んだのでよいよ本題ですが、現在の映画及びテレビの制作現場では、女性のいない部署は無いんです。「？」と思われた方も多いでしょうが、ほんの20年前などは女性のいる部署は限られていて、女優さんを除けば記録さんや衣裳さん、メイクの方や美術助手、制作部など限られていました。女性の監督に至ってはこの間まで数える程しかいなかったはず。

ところが今では女性の監督は勿論、カメラマンや美術デザイナーなど数多くの方が活躍しており、中には制作部全員女性の売れっ子チームも在るくらいです。

何故急激に割合が増したのかは判りませんが、少なくとも出来る人間が残るといふ法則が働いていることは確かです。勘がよく、機転が利いて、チームの中で自分がどう動けば良いかを理解し、責任をもって行動できるか。モノを創る現場で必要とされる資質がなければ、女性でも男性でも消え去るのが業界の理。そして根性です。これらの条件が合わさった結果、女性の割合が増えたのではないかと僕は睨んでいます。つまり映画やテレビの現場では、現実的な理由から女性の割合が増えたんだと思うんです。そして、彼女たちの職能なしに映画やテレビは作れない、いなければ減んでしまう、という結論に辿りつき…、え？だったら男がいなくても減ぶだろうって？確かに割合的にはそうですが、いなぎやいないで作れちゃうような気がするんですよ。だって、急激に女性の割合が増えたってことは、同じくらいの割合で男が減っているってことで、ご推察いただければ…あっ！映画の題名書くの忘れてた！えー、『希望ヶ丘夫婦戦争』という映画です。

(高橋巖/総合文化学科)

AUTHOR'S VOICE

『子宝と子返し』

近世農村の家族生活と子育て

太田素子著 藤原書店 2007年

『子宝と子返し』というタイトルは、近世農村の子育ての習俗の、いわば光と陰を象徴したつもりなのです。約20年かかって、やっとひとつの結論に確信をもつようになりました。それは、今日の学歴社会の子育てが、どのようなスタンスを持つにせよ、学校による人材分配システムという現実



から自由でないように、近世の子育ては、家の継承というシステムとの関係で、発展も困難も存在していたのだということです。わかってみれば簡単な事実ですが、農村の子育て意識を等身大に理解し、描き出すことには、史料的な難しさがありました。日記や祝儀簿、説話文学など、従来の歴史研究では実証性が低いと見なされてきた資料群を、どうしたら歴史研究の素材にできるか。歴史人口学の発展期だったので、宗門人別改帳を分析し、その地域の家族構造や人口動態を参照しながら、日記などの文書資料の意味を解釈するという方法を採用しました。次三男問題、出生制限、協働と子どもへの仕込み、母性規範や七五三習俗の農村への浸透など、見えてきた問題を、今後は現代の子育てとの関わりを意識しつつ深めてゆきたいと考えています。

(太田素子/心理教育学科)

ACKNOWLEDGEMENT

謝辞

青山紀子さん(人間関係学科 1985年卒)より、お母様の光子様が購読・保存されていた『暮しの手帖』39~100号(1957年~1969年)、『暮しの手帖 第2世紀』1~100号(1969年~1986年)をGFにご寄贈いただきました。今後の研究資料として活用したいと思います。心より御礼申し上げます。

ANNOUNCEMENT

ジェンダーフォーラムの2年間の活動を『GF活動報告書』として冊子にまとめました。GFSでご覧いただけます。